

令和5年度 (インクルーシブ教育実践研究校B) 報告書 三入中学校

1 学校の課題

昨年度、特別支援の観点からの生徒を見取る視点や支援のしかた等を学び、実践する中で、教職員の意識が大きく変容したことが生徒の変容につながったことは大きな成果である。一方で、めあてと振り返りの整合性や妥当性のある評価については教職員の理解がまだ不十分であるという課題が見えてきた。また、数年前に比べ落ち着いた学習環境が整ってきたにも関わらず、基礎的な学力が定着していないことは依然として課題として残っており、授業改善に向けた組織的な取組は急務である。また、今年度は新たな教職員が増え、全教職員がインクルーシブの視点を持った授業づくり、安心して学ぶことが出来る集団づくりに加え、引き続き「評価」についての研究を進めていく必要がある。そこで今年度は、「合理的配慮をふまえた特別支援教育の視点に基づく授業づくりと適切な評価のあり方」及び、「支持的風土の醸成された学級づくり」について研究を進め、組織的な実践を積み重ねたい。

2 研究主題

どの子も自分の可能性を信じ挑戦する全員参加の授業
～「特性に応じた支援と学級づくり」「妥当性・信頼性のある評価」を通して～

3 取組内容

(1) 「特別支援教育の視点に基づく授業づくり」に向けて

①授業づくりに向けての校内体制整備

○特別支援教育推進プロジェクトの設置

校長・教頭・研究主任・生徒指導主事・特別支援 Co を構成員とし、組織的に研究を進めるために研究方針等の立案、役割分担の調整などを行った。

○特別支援委員会の開催

校長・教頭・生徒指導主事・学年主任3名・特別支援 Co・養護教諭・SC を構成員とし、週1回情報共有や支援方法の検討を行った。

○個別ケース会議の開催

各学年1名の対象生徒について年3回、実態把握や支援方針を確認するためのケース会議を行った。組織的な取組にするために、会議の内容をまとめたものを特別支援委員会で共有した。

会議内容を非常勤講師・学習サポーターを含む全教職員に周知

○「みとりシート」を活用した学習サポーターとの連携

教員と学習サポーターの支援のベクトルを揃えるために「みとりシート」《資料1》で生徒を見取る視点【姿勢・指示に対する動き・視線・机上の整頓・読み・書き・計算】を焦点化し、学習サポーターと特別支援 Co で授業観察を行った。その見取りをもとに、月1～2回特別支援 Co と学習サポーターとの連絡会の時間をもち、支援のしかたを検討した。連絡会で出た気づきや支援方法を特別支援委員会で報告したり、学年の方針や取組に反映させたりした。

○巡回相談等の活用

広島市立広島特別支援学校サポートセンターとの連携や巡回相談指導で教えていただいた「教室の基礎的環境づくり」や「タブレットの活用のしかた」など具体的な支援方法を教職員に周知し、授業の中で活用できるようにした。

②対象生徒への授業や学級での具体的な取組

【生徒 A】

よいところ: 友達との関わりは良好。グループ学習にも前向きで、周りに助けを求めることができる。

板書をスムーズに写すことができる。何度も繰り返せば覚えることができる。

苦手なこと: 記憶の定着が難しく、点数につながらない。覚えたことを活用することや、長文や複雑な内容の理解は難しい。英語は単語を覚えることや文字と音の一致が難しい。

支援

- ・座席の配慮…教員が支援しやすいように前の方に配置するとともに、学習のサポートができる生徒と同じグループになるようにした。
- ・指示の仕方…口頭での指示は短く簡潔に伝える。色を使う(例: $y=2x+1$ $x=-2$)など視覚支援もあわせて行う。
- ・授業展開…意図的な指名で本人に説明させる、説明を聞いて理解させることを繰り返す。授業の中で全員での繰り返し学習を展開する。
- ・英単語プリント…複数の単語と意味をプリントの裏表で見るのは難しいことから、単語帳を作成し、一つずつ繰り返し学習を行うためのツールとする。

【生徒 B】

よいところ: 努力家で学習も部活動の練習もコツコツ取り組める。友達との関わりは良好。板書はスムーズに写せる。

苦手なこと: 漢字の読み、記憶の定着が難しい。自分から「教えて」と言えない。

学習に対してみんなより遅れているという意識が強く、困り感を持っている。

支援

- ・グループメンバーの配慮…学年としてグループ隊形を3~4人の隊形で統一すると同時に、本人が質問しやすい生徒と同じグループになるようにした。
- ・個別の相談…担任(特支 Co)と相談し、自分にあった学習のしかたを見つける支援をする。
- ・ルビうち教科書の使用。
- ・タブレット端末によるデジタルコンテンツの活用…繰り返し学習をするためのツールとして Kahoot!(インターネット上の無料クイズ作成サイト <https://kahoot.it>)の活用。問いに対して、4択で選ぶ⇒小テストで記述を繰り返し、定着をはかる。



【生徒 C】

よいところ: 自分にもできると思えば積極的に取り組める。口頭でのやりとりがスムーズにできる。

苦手なこと: 文字の読み書きや、思いを文字にすることが難しい。多くの文字を書くとき苦しくて涙が出る。ルビをふってもスムーズに読むことができない。苦手なことは途中で諦めてしまうことが多い。

支援

- ・タブレットの活用…デジター教科書を使った音声読み上げ、ワークシートのタブレット入力
- ・授業や定期試験における読み上げ。

(2) 妥当性のある評価について

○理論研修をふまえた教科会の実施

指導第二課指導主事による、妥当性のある評価についての理論研修を実施した。授業態度や提出物の提出状況等ではなく、シラバスで示した「達成目標(つきたい力)」に対する「身につけている力と課題」をもとに、授業のめあてを設定し、必然性のある言語活動を取り入れ、めあてに呼応する振り返りを行うことを再確認した。その研修をふまえて、毎月の職員会議後に教科会をもち、観点別評価や評価方法、研修で学んだことで授業に取り入れていることについての共有や協議をした。

○合理的配慮とその評価について

今年度は定期試験での合理的配慮について、ルビうち(6名)、読み上げ(1名)、時間延長(1名)を行った。これらの合理的配慮は評価に影響しないことはもちろん、授業中の小テストなどについても個別に実施するか、全員に同様に配慮を行うか、必要ないか等生徒の状況を見取りながら行うことについて確認した。

(3) 支持的風土の醸成された学級づくりに向けて

○理論研修、hyper-QU 研修会の実施

支持的風土の醸成された学級づくりについて学ぶために、生徒指導課指導主事による研修を実施した。また、生徒の実態を客観的に見取るために年2回hyper-QU を実施し、学級集団への対応や個への支援の検討や結果の変容を分析した。学級集団への対応として、各学級の傾向をふまえて行事や学級活動を通じた活躍の場の設定、暮会でのいいとこみつけやレクリエーションなど支持的風土を構築するための具体的な手立てを交流した。個への支援としては、各学年で学級生活不満足群の中の要支援群生徒一人一人に対して、声掛け、見守り、席の配置、見通しを持たせる掲示の工夫などそれぞれに有効だと考えられる支援を検討し、働きかけた。

また、上記の(1)～(3)について情報共有するためにインクル通信を特別支援 Co が作成し、全教職員に発信した。《資料2※一部抜粋》

4 検証結果

○対象生徒について

【生徒 A】について

授業展開の工夫として、意図的指名をして授業の中で繰り返すことを意識した。学習のサポートができる生徒を同じグループにして、説明をさせることや人の説明を聞くことを繰り返すことで自信が付き、自ら発表するなど前向きに取り組む様子が増えてきた。定期試験の結果も、前期期末から後期末で合計点が50点近く上がった。特に数学では15点から39点に上がっており、授業や学級での取組の成果が見られる。

【生徒 B】について

入学当初に比べて学級内で周りの生徒との関わりが増え、明るい表情が見られるようになってきたが、hyper-QU の結果は6月、11月ともに「侵害行為認知群」に属していた。結果をさらに分析すると、2回目で「かわり」のスキルは向上しているが学習への不安感が強まっている様子が見受けられたため、担任と個別相談を実施した。定着させるための学習方法がわからない様子だったので授業展開の工夫としてタブレットを活用して繰り返し学習を行ったところ、選択はできるが記述になると難しいことがわかってきた。また特支 Co と担任が相談しながら複数の学習のしかたを試してみたところ、そもそも問題文の漢字を読むことが難しい状況がわかった。そこでルビうち教科書を渡してみると、グループ学習で一番に発言するなどいきいきと活動に参加する様子が見られるようになった。点数として大き

な変容はないが、前向きに取り組む姿が増えた。

【生徒 C】について

これまでプリントやワークの記入などは途中で諦めることが多かったが、タブレット入力の形であれば最後まで取り組めるようになった。

○他の生徒について

全生徒に対して6月と11月に実施した hyper-QU を分析したところ、学級生活不満足群(要支援群)の生徒の中には表に見えている様子とは違う結果を示している生徒もおり、客観的データから何らかの困り感を抱えている生徒に気づくことができた。その生徒たちに声掛け、見守り、席の配置、見通しを持たせる掲示の工夫など意識して働きかけたことや、学級としての傾向から手立てを考え実践したところ、6月に比べて学級生活不満足群(要支援群)の割合が16%から12%に減った。

一方で、学校評価の生徒アンケートの「自分の良さが周りから認められている」の項目については、中間の90.3%から77.7%に下がった。教職員アンケートの「支持的風土の醸成を意識している」は100%であることから、教職員の意識と生徒の意識の差が大きく開いていることがわかった。ただ、教職員アンケート「小グループなど、お互いの考えを交流する場面を毎時間設定している」の項目が中間の100%から69.6%に下がっていることから、授業においても生徒の活躍の場を意図的に設けることの意義を再確認することができた。

○「みとりシート」の活用について

学習サポーターが学級全体の様子を焦点化した形で観察することができ、静かに困っている生徒や授業者が気づかなかった支援の必要な生徒の様子を見取ることができた。その情報を共有することで教員も実態把握ができ、対象生徒だけでなく多くの生徒の有効な支援につながった。

○教職員の意識の変容

教職員アンケートの「合理的配慮に基づいた支援(すべての子どもの学びを支える支援)の方法を意識している」という項目で肯定的評価(毎日取り組んだ・取り組んだ)が昨年度は80%だったが、今年度100%になった。アンケートの記述では「めあてを黒板掲示とともにワークシートに記載している」「授業の見通しが持てるよう、流れを示す」「振り返りを單元ごとに、チェック項目の欄をつくって行った」「作文を書かせるときに、タブレットでもよいことにした」など具体的な取組が多く挙げられた。

また、ケース会議の中で、支援を検討することに加えて、生徒が自分自身で特性を理解するためにSST やライフスキルなどの取組を行うことや自分に必要な支援を理解していくことの必要性について教員から自発的な発言が出るようになった。

5 研究成果

昨年度、インクルーシブ教育や合理的配慮についての土台ができたことで、今年度は対象生徒以外にも日々の生徒の姿から支援を検討する動きが広がった。「特性に応じた支援と学級づくり」「妥当性・信頼性のある評価」に重点を置き、年間を通じて研修を繰り返して行く中で、具体例やその成果が多く挙がるようになり、実際の授業や学級活動の中で取り入れていこうとする雰囲気が出てきている。生徒の実態や困り感に対して、教員が入試や高校での措置も含めてどのような支援ができるかを知り、具体的な支援の選択肢を増やすことができたのは、続けて研究してきた成果である。

今年度さらに教職員の理解が深まったのは、自分の特性に気づき、さらには将来的に自分に必要な支援を自ら求めることができるという「セルフ・アドボカシー」の視点である。授業を通してこのような人材を育成していくことが重要だという意識をもつことができた。今後もこのような意識が教職員の中から自発的に湧き上がってくるような校内体制を構築したい。